

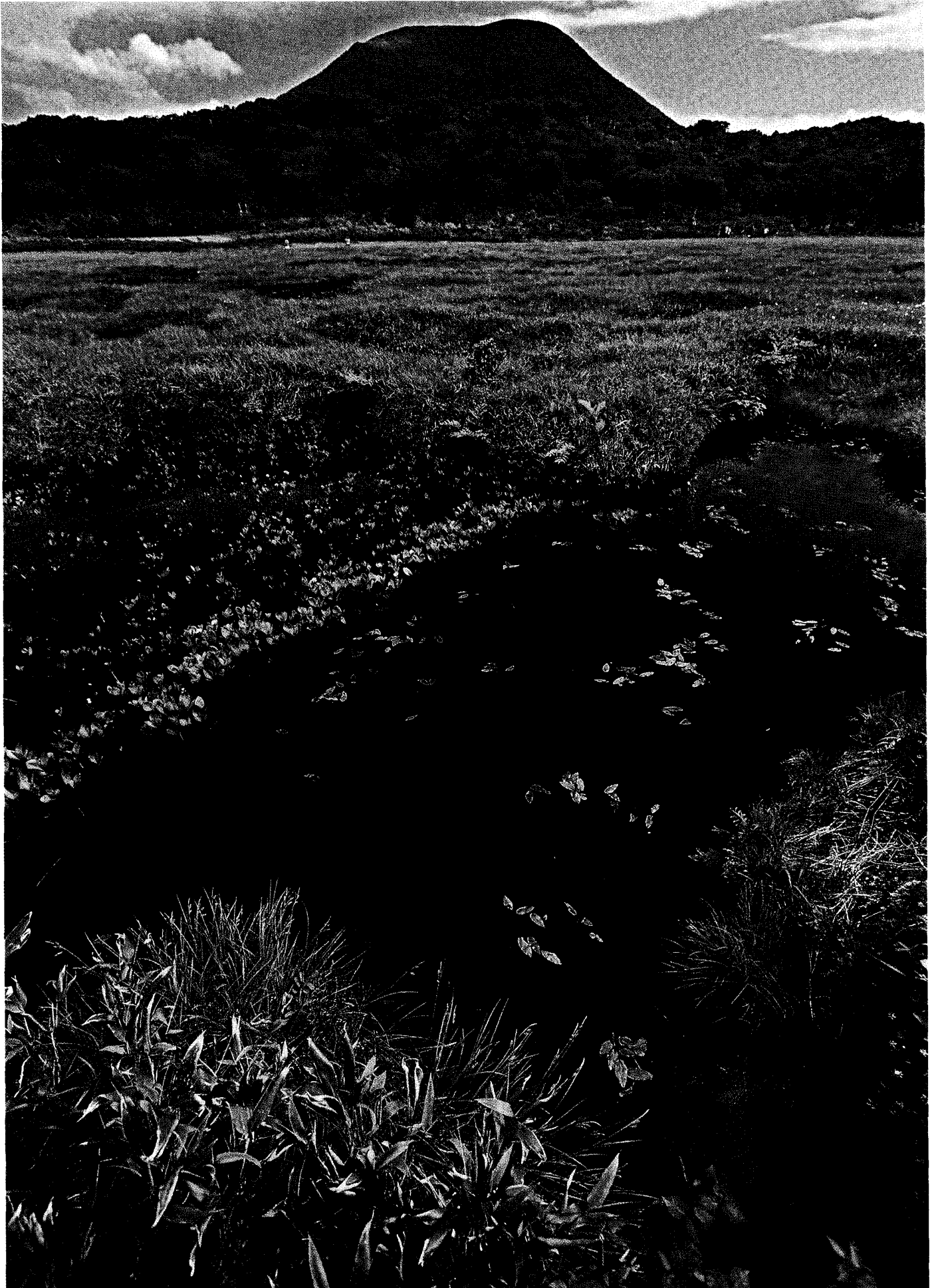
## 春から秋へ (写真)

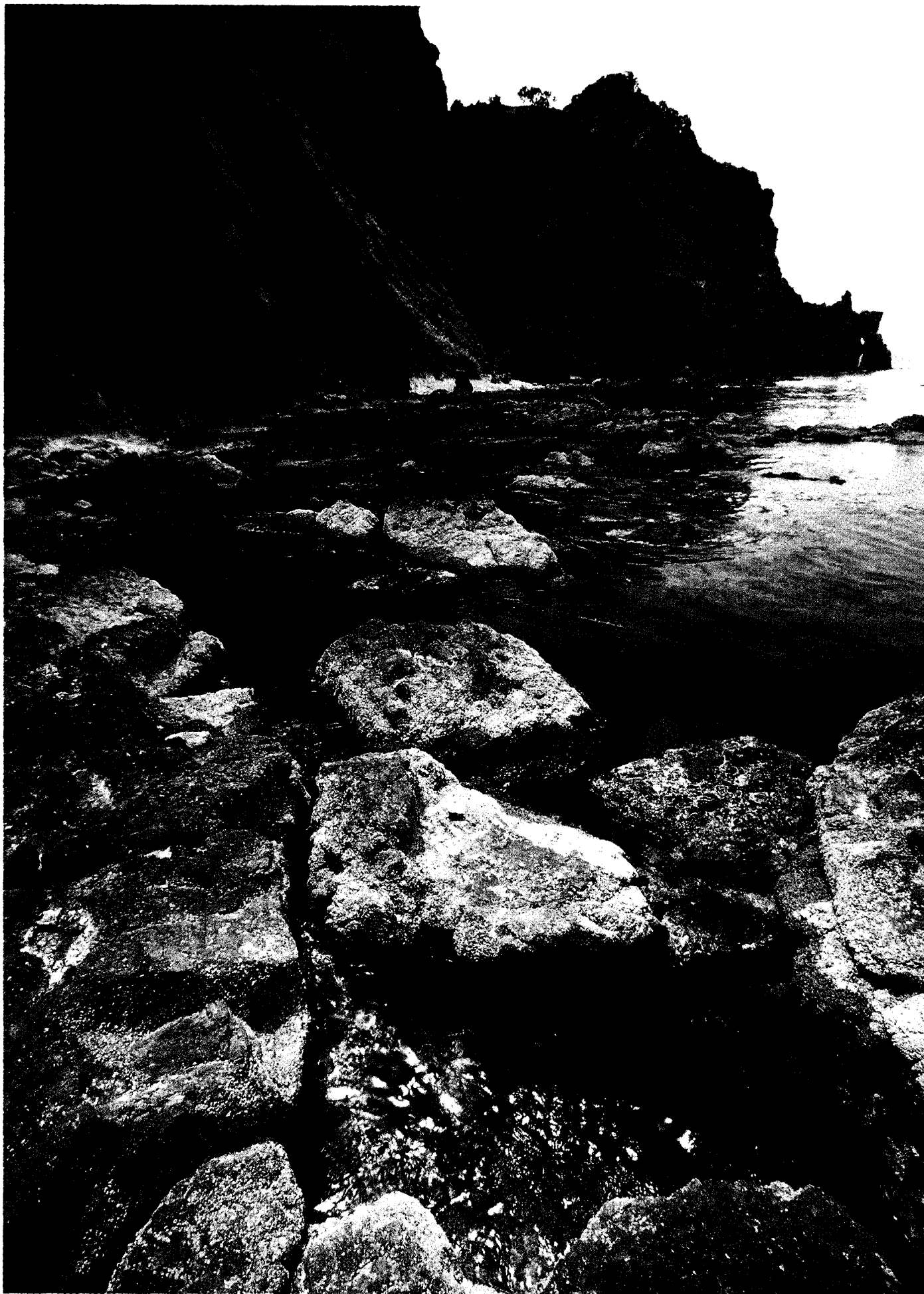
From Spring to Autumn (Photograph)

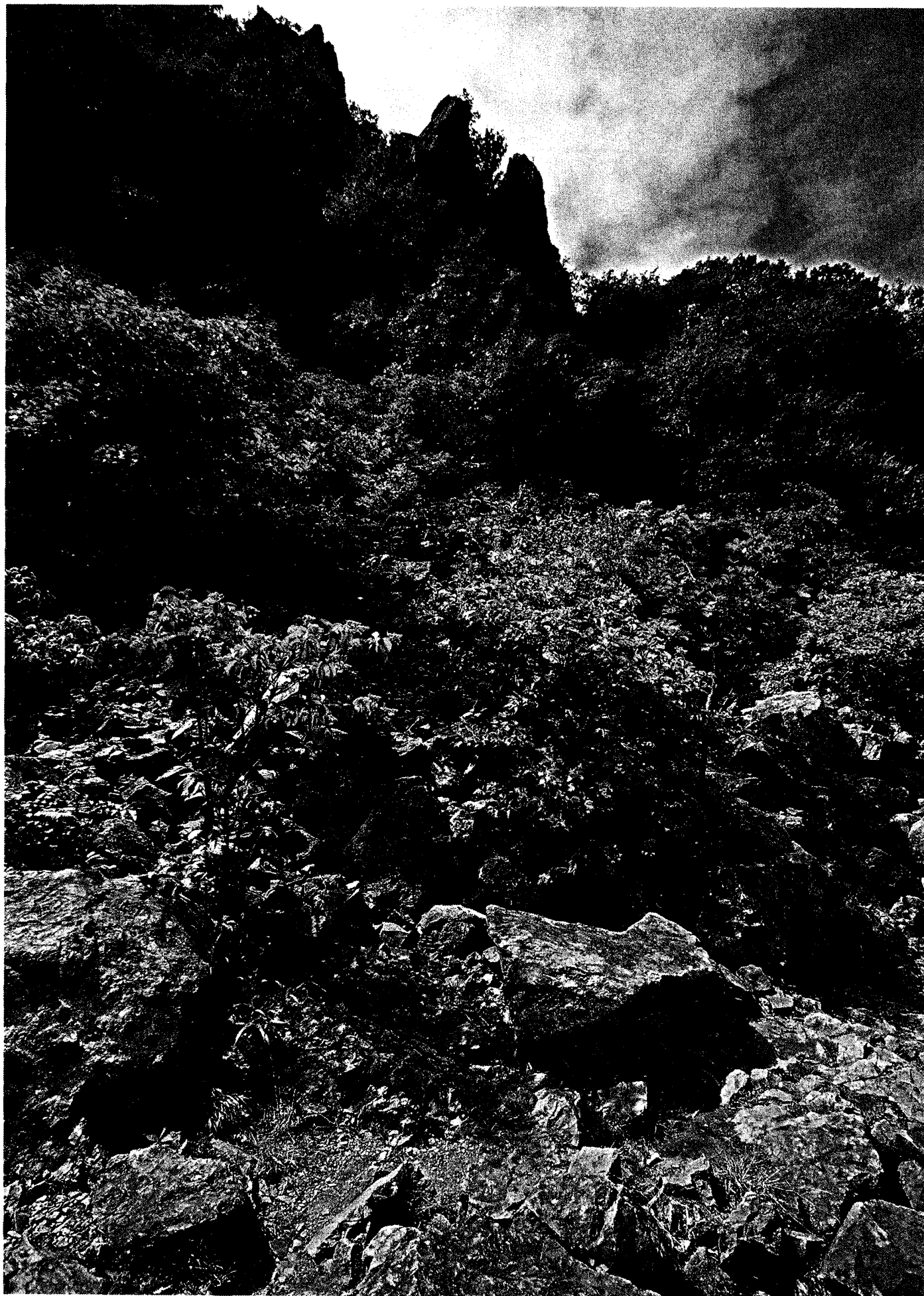
藤 原 等

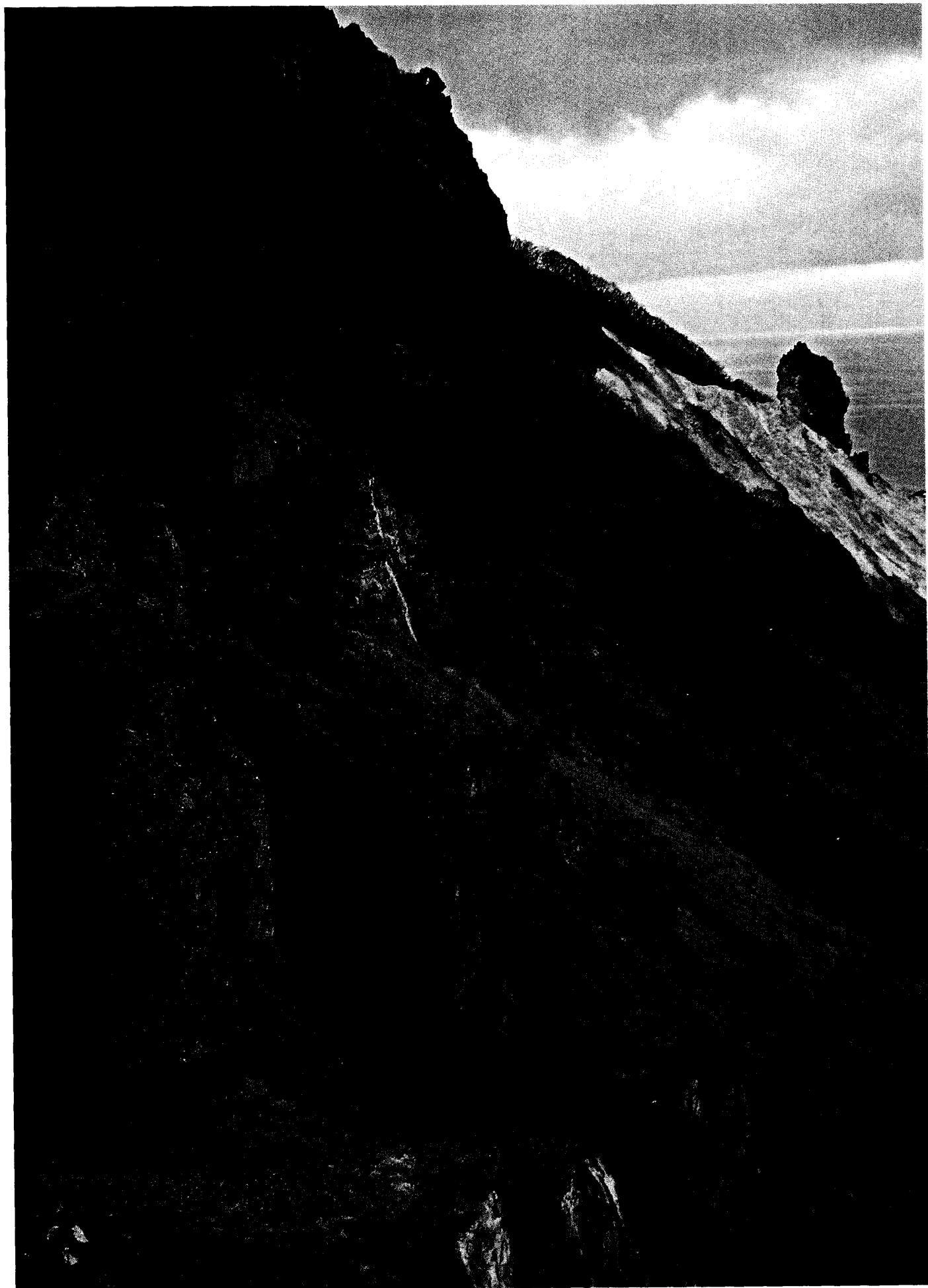
Hitoshi FUJIWARA



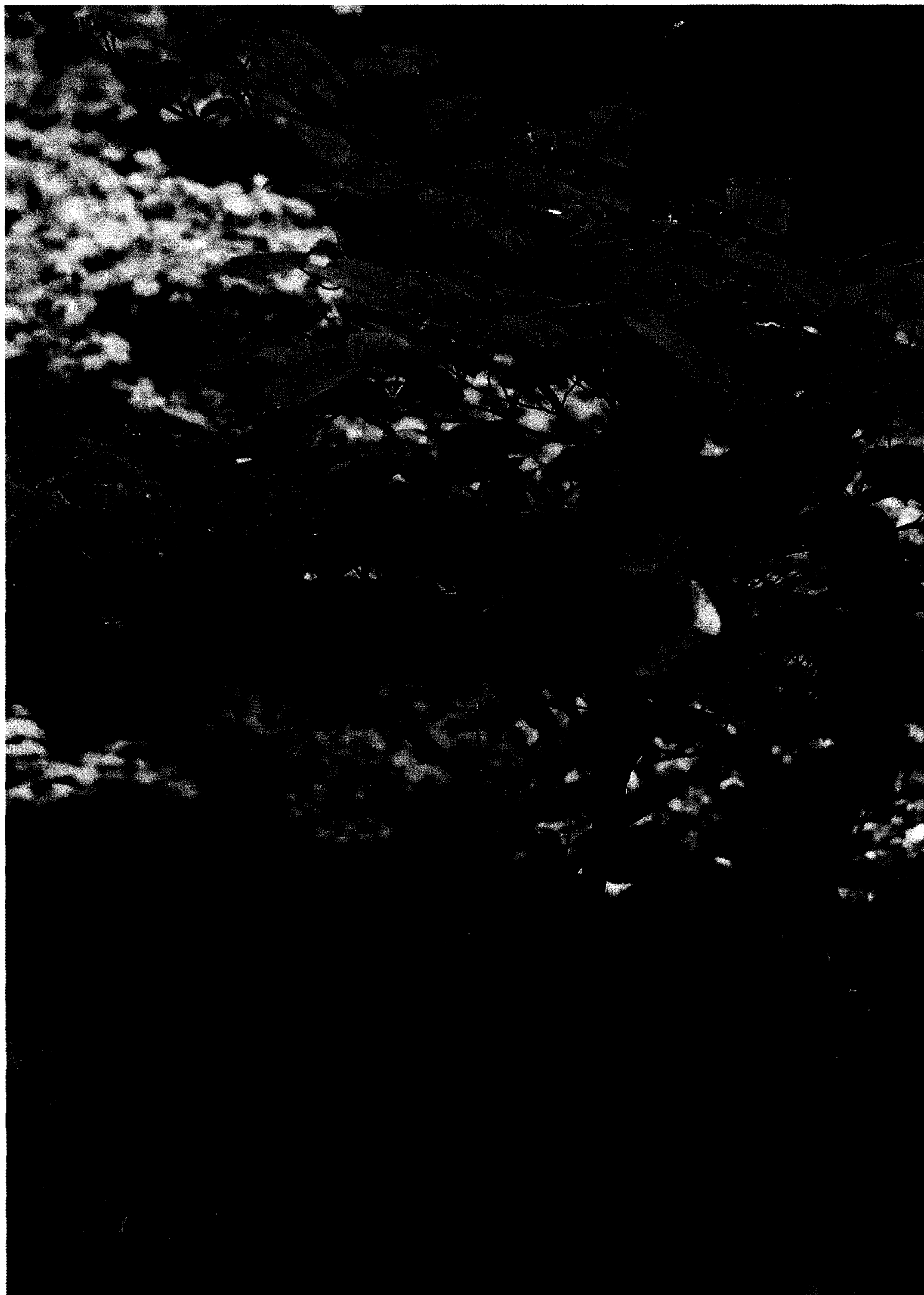




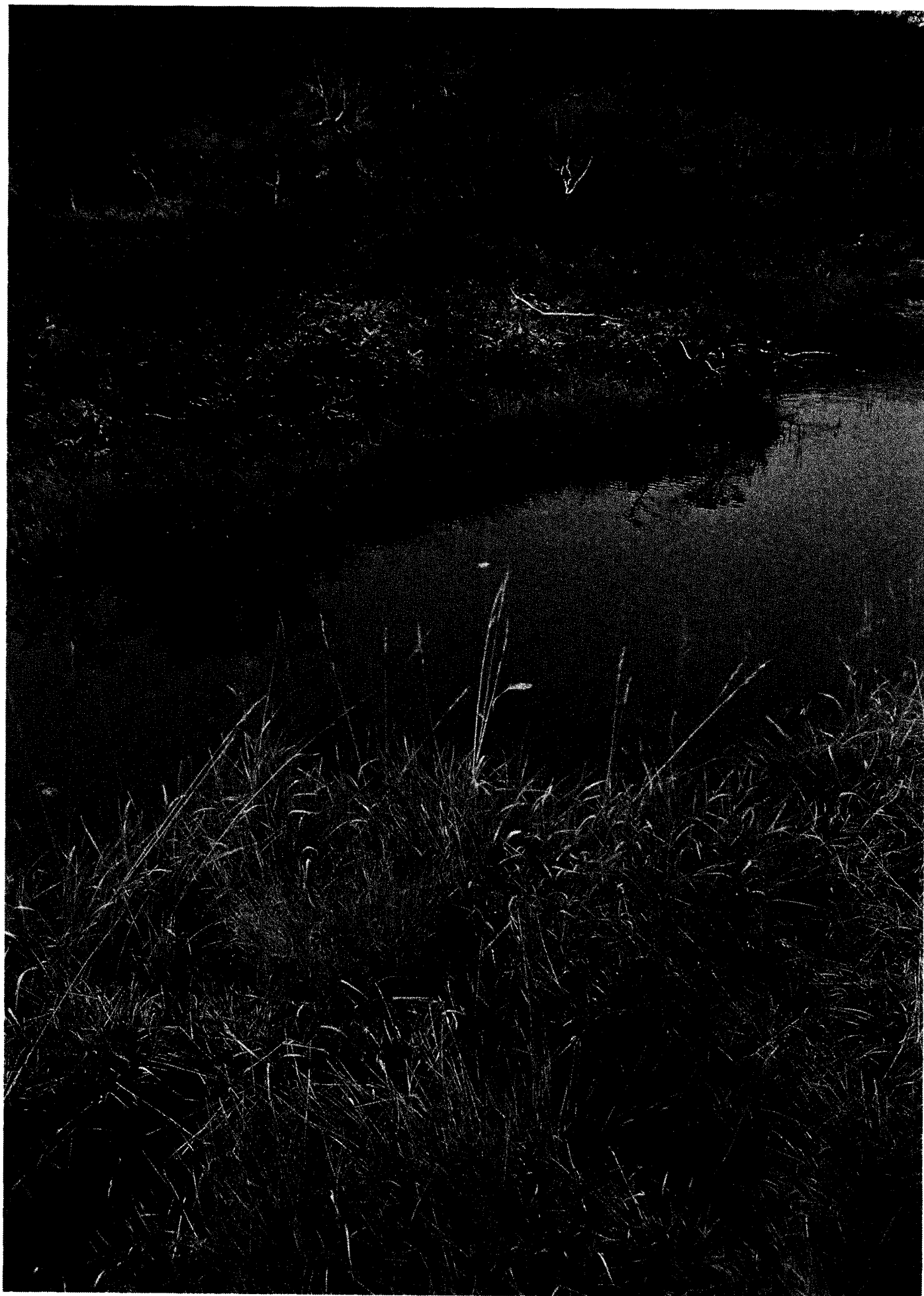




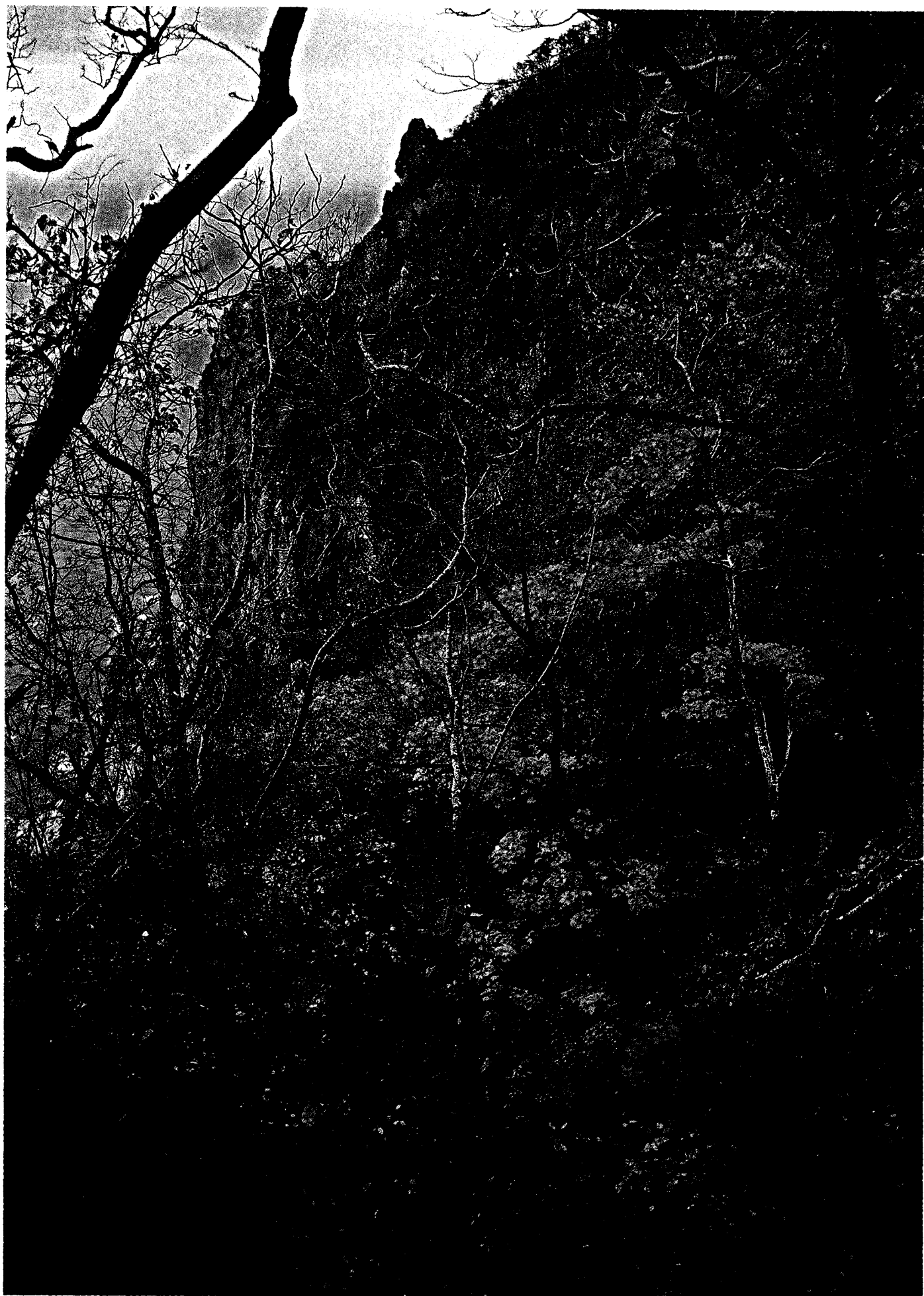


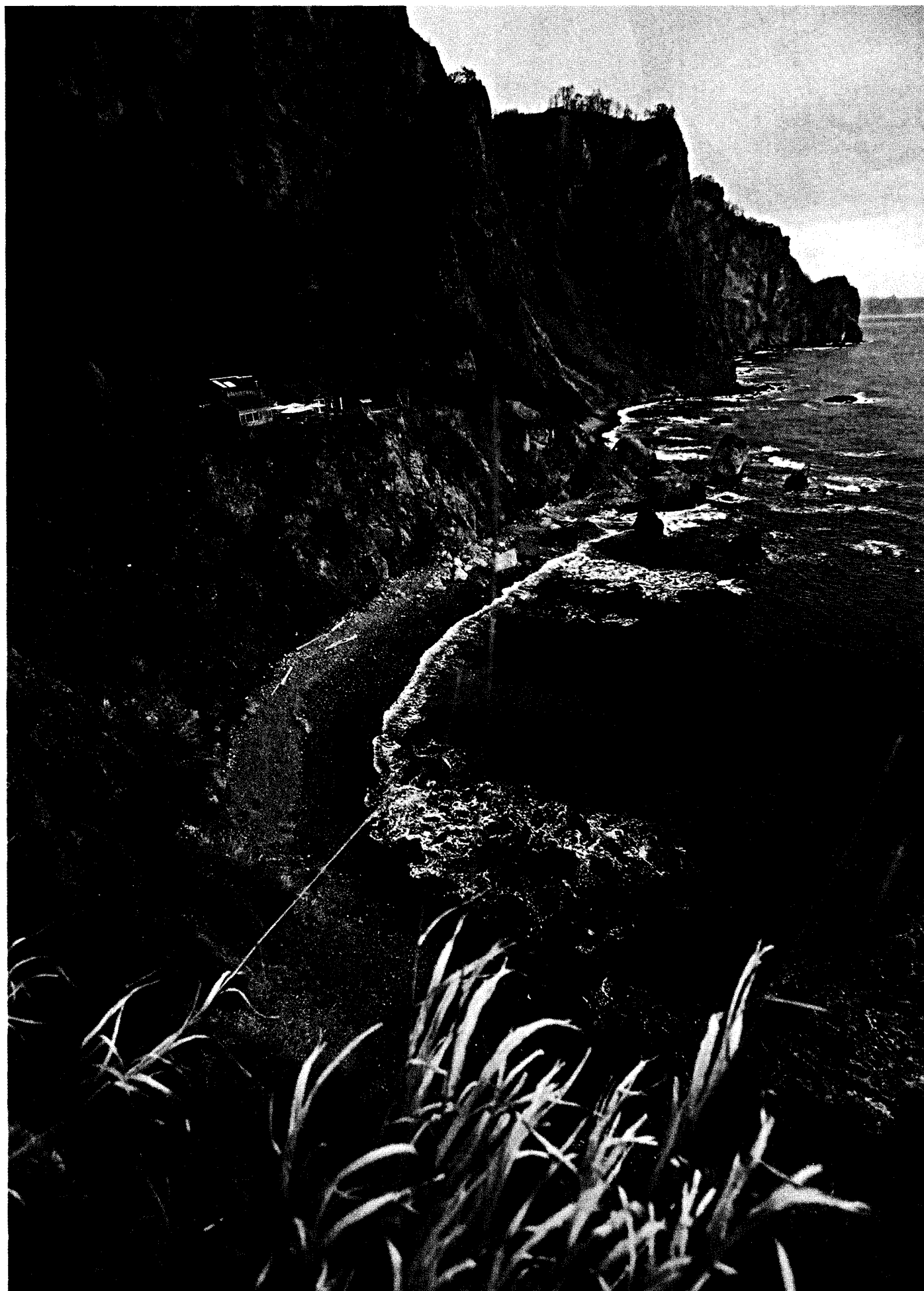












写真はカメラにフィルムを入れてシャッターを切り、現像引き伸ばしの作業をすれば確かに写るのである。たった今、自分が見ている視覚世界を固定するために写真を写す。しかし、生体が見た視覚世界とフィルムや印画紙上に「写真」として定着された画像は類似してはいるがかなり違った別物である。レンズ交換可能なデジタル一眼レフカメラがかなり普及してきた。第2世代に入ったとも言える（しかし、撮像素子の大きさが問題でAPSサイズなので、35mm判フルサイズのものがやがて出てくるであろう。現在でもフルサイズの撮像素子を搭載したものがあるが100万円程度の価格では手が出ない）。コンピュータ画像の世界のことではなく写真の世界でもデジタル写真が使い物になってきたのである。フィルムの場合は、フィルム上に光学レンズによる結像として定着し捉えたら、現像引き伸ばしの作業でいくら手を加えてみてもその限界は見ればわかる。オリジナルを印画として鑑賞することもできるし、ポジとして投影的に鑑賞することもできた。ところが、デジタル写真になるとデジタルカメラのデジタル信号の媒体に記録されたポジフィルムの画像を見ることはできない。何を言っているかといえばデジタル写真のデジタル信号の媒体をもう一つの媒体であるCRTブラウン管か液晶式画像再生装置を通して見ることになる。またはプリンターを通してのペーパー上に再生しなければならない。CRTブラウン管にせよ液晶式画像再生装置、プリンターを通してのペーパー上の再生にせよコンピュータを通過させることによって、デジタル信号を劣化させずにほぼ無限に画像加工が可能なのである（しかし劣化は本当のところ起こるのであるが……）。おそらく、ボクの追究してきた「写真」の世界は、ペーパー上の表現だから、ボクがデジタル写真を撮ったとしても、おそらくプリンターでペーパーにプリントされたものになるのではないと思われる。ポジフィルムから得られた画像にしても、ネガフィルムから得られた画像にしても、プリントされた写真は多少の違いはあってもどれも極めて似たものとなる。しかし、デジタル信号の媒体から取り出される画像は、プリントする度にイメージをいくらかでも変化させながら画像を得ることができることになる。撮影時の意思とは無関係に加工することができることにもなる。そういう意味では写真のオリジナル性は、おそらく、たった1枚のプリントに帰属することになるのではないかと考えられる。と、するならば、今日まで、アナログの世界でオリジナルな写真を追究してきたボクの写真は、どういうことになるのであろうか。デジタルカメラを前にして、ボクの心は大きく揺らいでいる。今回の「春から秋へ」の撮影は、フィルム写真で、オリジナルプリントで入稿しているが、印刷の段階でデジタル技術が使用されているわけだから頭がおかしくなる。しかしながら注意深く指摘するならば、生体の、ヒトの網膜は、実はアナログ信号をデジタル信号に変換するコンバーターの役割もしているということなのである。網膜は、厚さにして約0.2mmの透明な膜であるが、大まかに言って3つの細胞層からできていて1億個以上の神経細胞が密集している。3つの細胞層の1つが神経節細胞層で約80万個の細胞によってアナログ信号をデジタル信号に変換している。ヒトの脳内処理はこのデジタル信号をまた化学物質のアナログ信号として伝達している場所も存在するわけだが、どうやら、そんなにデジタル画像を特別視する必要がないのかもしれない。（'04年12月22日）。